

史乘に屢見える曲先は *Kūsān* といふ形に當るものに違ない。十六世紀の半頃に書かれたミルザ・ハイダルの中亞史タリキ・ランディに *Kūsān* (= *Kūsān*) と記してあるのもこの形を確證するものであり、ラシッドウッディンの蒙古史に *Kūsān* とあるのも正しくは *Kūsān* であるとするべきだといふ考は曾てペリオ氏も發表したところである。それでこの文書に見える *Kūsān* をこゝに見た曲先に當るものとするれば、文書中に記されて居る摩尼教徒の生國はみな今の新疆省内に含まれる地域であつて、ウイグルの官號を有する人として極めて適切なるを覺える。

第二の文書は余の藏する佛教の經典であつて、性質上本生談の種類に屬するものと思はれる一葉、兩面に十七行宛を残してある斷片に過ぎぬ。その一面の第八行目から九行目にかけて、「*Kūsān* 國に *Suvarnapuṣṣ*…と名づくる王が」云々といふ語が見える。假りにこの *kūsān* も前の摩尼教文書に見えるのを解釋したのと同様に曲先即ち今の庫車、古の龜茲を指したものと見ると、唐の太宗と同時代のこの國の王蘇伐疊 (*Svarnate*) の父に蘇伐勃駛即ち *Suvarnapuṣṣa* といふ王があり、玄奘の西域記にはこれを金花王と譯してあることは曾てレギー氏の論じたことであつて、こゝに「*Kūsān* の國に *Suvarnapuṣṣ*…と名づくる王」云々と書いてあるのは、語尾の二字に當る處が殘缺して居るけれども、殆んどこれに應ずるものと認めて差支ないやうに思はれる。

もしミュラー氏の見解に従つて *kūsān* を貴霜と見るならば、第一の文書に於ては、ウイグル人の間に摩尼教徒である貴霜國の人が混住してゐたことを認めねばならぬこととなるが、ウイグル人が摩尼教徒となつて、しかも今の新疆省地方に移つてから後の時代に、尙ほカブールの谷間地方の貴霜即ち *Kūsān* といふ國名なり國人なりが認められて居つたことを承認出来るであらうか、或はこの文書は摩尼教關係のもので、ミュラー氏の解説したのは佛